

小川能守宛松崎茂平書簡

小川家文書 いー104より

ここに展示しております書簡は、岡茂こと松崎茂平から大変な蔵書家であった小川能守にあてて出した、あることを依頼している文書です。さてその内容は、

最近「油長」と「堀嘉」という二人の商人が書物商売に進出するにあたって、駿々堂と兔屋という当時の大書店からたくさんの安売り本を仕入れて売り捌きたいので、書物仲間に入れてほしいと「古新」と私（茂平）に対して言ってきています。とりあえずは同意をしていますが、そのような思いつきで始める事業には危険もつきまとうこともあり、成功するという見込みも立てられません。そこで蔵書家でいらっしゃる能守様にもご意見を伺いたいとともに、誠に突然のこととて恐縮ですが、従来ご購入されている書物のうちでこの目録中の書物類に定価が分かるものがありましたら明朝までにご記入いただきたい。

という非常に勝手と思われる書簡です。よほど切羽詰まっていたということでしょうが、逆にそれだけ二人の関係も深かったものとも考えられます。小川能守はたいへんな蔵書家であっただけではなく、文芸全般に造詣が深かったところから、狂歌や川柳に長じていた松崎茂平とはその関係で親交があったとしても何等おかしくはないでしょう。松崎茂平は幕末の頃から田辺福路町で荒物を中心に商っていた人物ですが、貸本業も兼ねていたことが確認されています。「古新」は古金屋新十郎といって炭の製造販売を本業としていた人で、文面からするとこの人物も貸本業を兼ねていたと考えるのが妥当でしょう。

ところで、小川能守が明治20年5月に記録したとされる田辺の各町の商店図（『田辺町誌』所収）によれば「油長」というのは、田辺の栄町から秋津口に折れる角にあった中川長助商店（栄町30番地）がそれにあたると考えられますが、もう一つの「堀嘉」という商店は見当たりませんでした。ちなみに、この当時田辺にはほかに娛目堂（栄町）と岡庄（本町）という「かし本」業を営んでいる店があったようですが、荒物や小間物商の中には「かし本」や新聞販売などを兼業していた事例が多いことから、まだまだほかにもいたかもしれません。

この話の当事者である松崎茂平（岡茂＝書籍部）と中川長助（油長＝砂糖諸油菓子原料諸紙糸類ほか販売）とはそれぞれに明治31年9月に商業登記したことが『紀伊毎日新聞』紙上に公告されています。

ただ、この話の顛末がどうなったのかを窺わせるような資料が小川家文書の中には見つかりません。詳細が不明なことは残念なことです。1つの書簡をきっかけとして地域の貸本屋事情が少しは明らかになってきたことはうれしいことではないでしょうか。

（文責：須山 高明）